２０１９．８．２６
畑　啓之

「山片蟠桃は伊能忠敬と出会ったのか？」の追究は知的ゲームである

山片蟠桃（Wikipedia）によると、高砂生まれで 1748 年－1821 年。13 歳のとき大阪の伯父の養子となる。幼時から大阪の両替商である升屋に仕え、明和 8 年（1771 年）に 24 歳の若さで番頭となり、傾いていた経営を軌道に乗せ、桝屋を繁盛させた。財政破綻した仙台藩に建議し、差し米を利用し、無駄を浮かせて節約し、藩札を発行するなどした。その一方で学問に励み、大阪町人・大阪商人の学塾である懐徳堂で中井竹山・履軒兄弟に朱子学を、先事館で麻田剛立に天文を学ぶ。

神戸新聞　2019年(令和元年)7月31日　水曜日

歴史愛好家が調査、冊子に

高砂出身 町人学者　測量家

蟠桃は忠敬と出会ったのか

高砂　ともに江戸時代後期に活躍した、高砂市出身の町人学者・山片蟠桃（1748～1821年）と、測量家・伊能忠敬（1745～1818年）の出会いはあったのか。そんなテーマで同市の歴史愛好家グループが調査し、冊子にまとめた。各地に残る数々の史料を改めて確認したり、関係者の子孫を訪ねたりして、導き出した結論とは―。（切貫滋巨）

同時代を生き、同じ天文暦学を学び…確証はつかめず

冊子「郷土の星　天文学者としての山片蟠桃」をまとめたのは、いずれも同市在住の高塚洋さん(75)、亀野忠重さん(71)、清水敏男さん(72)。3人は、全国を歩いて測量し、日本地図を作った伊能忠敬を、10年以上研究するグループのメンバーでもある。

3人は昨年度、高砂市立図書館で開かれた市民向けの「市史ゼミ」に参加。以前から関心を持っていた、蟠桃と忠敬に交流があったという説の検証を研究テーマに決めた。両者の出会いは、映画「伊能忠敬―子午線の夢」（2001年）などで描かれているが、史料による裏付けはないとされる。

ほぼ同じ時期に生まれ、死去したのも同時期。天文暦学を学んだという共通点もある。高塚さんらが着目したのは、蟠桃が通っていた大阪の私塾「先事館」。蟠桃と同じ門下生であった高橋至時は、後に天文学者として江戸に行き、忠敬に測量に必要な天文学を教えている。つまり蟠桃は、忠敬にとって師匠の兄弟弟子だったという。

研究では、史料で確認できる両者の動きを年表にし、出会う可能性があった時期を調べた。忠敬が書いた「測量日記」によると、1805、08年に測量で大阪を訪れ、先事館の関係者らと交流したことが分かっている。高塚さんは「蟠桃もその一人として接触していた可能性はある」とする。ただ日記には蟠桃の名前は登場しない。

一方、蟠桃の主家である山片家の蔵書からは、忠敬の測量によって作成された地図「伊能小図」の写本が見つかっている。入手した背景ははっきりしないが、当時、地図は軍事機密とされるほどのもの。何らかのつながりがあった、と強く感じさせる」と高塚さん。

各地の図書館や研究グループと連絡を取り、専門家らの意見も聞いたが、両者の関係について確証はつかめなかった。高塚さんらは「状況証拠とも言える間接的なつながりはいくつも確認できたが、両者の出会いを証明する記録は見付けられなかった」と悔しがりつつ、冊子については「出身地の高砂で、蟠桃の存在をもっと知ってもらうきっかけになれば」と力を込める。

冊子は地元企業の協賛を受けて千部発行。調査の過程に加え、高砂や大阪の蟠桃ゆかりの地を写真と地図付きで紹介している。高砂、加古川市の図書館や小中学校に提供するほか、高砂市観光交流ビューローや、加古川観光協会で無料配布している。

山片蟠桃　現在の高砂市神爪生まれ。13歳から奉公した大阪の両替商で番頭を務め、仙台藩の藩札として藩財政の立て直しに貢献した。天文学や暦学を学び、晩年には合理主義的な立場から著した『夢の代（しろ）』を完成させた。

山片蟠桃と伊能忠敬のつながりについて調査した（右から）亀野忠重さん、高塚洋さん、清水敏男さん＝加古川市役所

歴史はロマンである。特に確実な証拠がないもの、例えば卑弥呼の邪馬台国はどこに？などは類推に類推を重ねて、一種の知的ゲームである。考えようによっては、確実な証拠が出てこないほうが、歴史好きにとっては良い状況である。確実な証拠が見いだされた時、卑弥呼に関する興味は失われるであろう。

山片蟠桃と伊能忠敬の話もこれに似ている。ロマンである。答えがないから限りなく探し求める。弱い状況証拠でも、数がそろえば立派な論拠となる。記事によると、蟠桃の主家から伊能地図の写本が見つかった。まだこれだけである。この話、いましばらくは続くことだろう。

しかし思うのである。近代においては、太い二つの直線が干渉しあったときには、当然そこから何か新しいものが生まれ出るのではないかと。ただ、誰かと誰かがどこかの会議場で偶然に同じ時刻に同じ空間を占有したというだけでは意味がない。新聞記事では、この新しい創造が何であるのかが示されていない。